

昭和55年2月1日 第3種郵便物認可  
平成19年1月1日発行（毎月一回）日曜日  
発行雑誌 沖／第38巻第1号

沖

俳句雑誌「おき」

1月号

沖  
発行所

# ホットワイン

能村 研三

## 新年を迎えて

二〇〇七年新春、「ルネッサンス沖」を掲げ、昨年一年、新しい結社を創刊したつもりで取り組もうと意気込んだが果たして結果はどうだったであろう。私も定例の本部例会、同人句会、カルチャーなどの句会その他に地方にも時間のある限り出かけ、「ルネッサンス」の志をお話させていたのだ。

雑誌の方も、編集部の方々の熱心な協力で新しい企画も取り入れて、皆さんが勉強しやすい紙面を作ったつもりである。

勉強会や同人の研修会、地方で開かれる大会についても、多くの人が集まっただけのイベントに終わらせることなく、意義のある勉強会にしようとの大会のあり方についても、根本から議論して改革を試みた。

今年の同人研修会は、いつもより早い二月に、中央でやることになり、東京市ヶ谷の会場をとった。勉強会も開催時期を気候の良い季節にしようとして十月頃に琵琶湖周辺の開催を計画している。

また、本年五月は先師登四郎が亡くなって六年目となるため、七回忌の同門俳句大会を開催することにし

神の意の枯れを尽せる蓮田かな

裏側に炎を蔵す大楯火

深更の稿閉ぢてよりホットワイン

鰯酒や同齡は早や老いたがる

霧寒し小役人などにはならず

橋脚の琴柱めきたる冬暮色

冬籠煙草の匂ふかの蔵書

聖堂を天降る音や十二月

迷ふなく素志を貫く去年今年

わが町の砂洲に黒松淑気かな

た。先師登四郎に嚆矢を受けた弟子たちも徐々に高齢化しているので、「沖」という結社を越えて、かつて登四郎に教えを受けた人が集えることが、登四郎にとつて何よりの供養になると思っている。「沖」から独立した、結社の主宰も皆賛成してくれて、同窓会的な句会が出来るのではないかと今から楽しみにしている。

更に、この時期に合わせての出版は無理かとも思うが、七回忌を機に「能村登四郎全句集」の刊行へ向けて準備を始めようと思っている。

その他、中央の句会だけに留まらず、地方へも去年にも増して積極的出かけようと思っており、大きな句会だけでなく、たとえ小さな句会でも機会があれば参加したいと思っている。

「ルネッサンス沖」二年目、皆さんと一緒に全国に誇れる結社づくりをしていきたいと思うので、よろしくお願ひしたい。



能村 研三

# もみぢどき 林 翔

## 遺された手紙

毎日のように送られてくる句集、忙しい時や体調の悪い時は、つい、「積んどく」になつてしまふ。しかし先日、文庫本らしい軽い冊子小包が届き、これは直ぐ開封した。著者は宇多喜代子。書名は『ひとたばの手紙から』という長い名であるが、副題に「戦火を見つめた俳人たち」とあるから読まずには居られない。

その日は、前日に某誌へ原稿を送った後で、少しほつとしていた時であつたから、直ぐに読み始めた。忽ち惹き入れられ、「食事時間を除き今日一日で読み了えよう。」と考へたのだが、やはり九十二歳の私には無理であつた。夕食後は休むことにして、翌日の午前中に読了した。

宇多氏は昭和10年生まれ、開戦の時には6歳、終戦の年でも10歳である。だから体験に基づいて書かれた部分は極めて少ない。それなのに、戦後五〇年目の一九九五年に邑書林

古民家の草むす屋根や紅葉雨

杉山に黄葉の櫛ただ一樹

紅葉を見せせらぎを聴き佳き多忙

のたうてる蔓も色づき草紅葉

もう要らぬ藁堆か敗残兵のごと

紅葉映えホテルに朝のシャンデリア

すぐ終る朝の邦楽菊新た

山茶花に声なき歓喜初みぞれ

厚着 毛皮 静かな息が生きてゐる

から初版を出版し、今度、角川書店から文庫本として再版されたのであった。

「ひとたばの手紙」とは、著者がニューヨーク郊外のシー・クリフという静かな町に住む従弟に招かれて渡米した時、元ジャズシンガーだったメリーアンさんと出会い、メリーアンが米兵慰問の為に硫黄島を訪れた時、洞窟の中で偶然拾った手紙の束、それを宇多氏に託したのだそうである。

それがきっかけだとしても、以後無数の文献を読み漁りなどして本書を成した宇多氏の精神力の高さ・強さには脱帽せざるを得ない。



# 蒼茫集



冬の朴

吉田陽代

こころの底まで届く光や銀杏散る  
往き帰り歩くと決めて鯛雲  
今日の遺影ほほ笑みて見ゆ天高し  
夫のなき歳月天は雪降らす  
煮返しておでん家族のごとくあり  
無駄のなき枝ぶり空に冬の朴

轍

荒井千佐代

できたての轍なりけり木の実降る  
波頭尖つてきたる照葉かな  
納戸神在す昏さや石路の昼  
冬の日や菓子型抜けし星ならぶ  
赤い羽根さして点滴換へに来る  
懺悔室出て上弦の月赤し

太陽の直径

辻 美奈子

太陽の直径小春日和かな  
星あふれしむ風呂吹に箸しづめ  
とんとんとすれば眠る子神無月  
煙し銀とは十一月の日暮かな  
冬立つや刺子に藍の木綿糸  
蜜柑にも子にも臍ありかがやけり

風のひとひら

千田百里

色なき風この身も風のひとひらか  
雁渡る西海あまた島放ち  
星飛ぶやをんなの羽化はタラップで  
月太りつつあり神の旅発ちぬ  
エレベーターに家族の詰まり文化の日  
石路咲くや微熱の髪の毛の重かりき

玉子酒 安居正浩

秋空につづく広さの草千里  
目葉の雫のそれで秋惜しむ  
青空にすつくと银杏黄葉かな  
ひとさわぎありて隣家の七五三  
頼らぬと言ひ張つてゐる玉子酒  
戸袋に何の明るさ一葉忌

これは何 北川英子

雨月かな開けて蓋裏金蔴絵  
月明の湖ありどうぞお構ひなく  
冷まじや銀翼二分おきに翔ち  
ボジョレーヌーボーいま冬空を来つつあり  
冬着出し内ポケットのこれは何  
エネルギーの呪縛より抜け茶が咲くよ

千仞の谷 藤原照子

古書市をぬけニコライの鐘さやか  
在来線野山の秋の親しかり

千仞せんじんの谷へ刻かけ散もみぢ  
怒濤音断崖の石路ひとところ  
かかはりのほどよき垣根茶の咲けり  
雑木紅葉武蔵相模と境なき

透明な初冬 辻直美

唐辛子朝日のあたる愛でたさよ  
近松忌途中地方銀行へ寄る  
山眠るトンネルなかの赤電話  
新藁のゆたかにうさぎ子を育て  
遠火事や薔薇のかたちの角砂糖  
老クリントイーストウッド透明な初冬

霧湧く 湯橋喜美

模糊としてをりしが箒草紅葉  
黙読の時に声にし火の恋し  
白菜の芯に陽の渦越土産  
夫の世へ攫はれてゆく霧湧く夜  
木枯に押さるる旅か遺されて  
年賀辞退書く午後の日をひき寄せて

# 潮鳴集

師系坂ようこ

鳥渡る出土鏝の千々のこゑ  
横書の戸籍簿もみぢ且つ散りぬ  
裏富士の風の磨きし芒原  
小春日の赤子をあやす京ことば  
詩の師系思ふ雪吊を花とみて

みむらさき 服部 早苗

はつふゆの背剝りの深き木の仏  
記入例の架空人物みむらさき  
新車とは自転車のこと秋うらら  
風待つてゐるぎんなんも草原も  
冬銀河凶のみくじは持ち帰る

孤心 高橋 あさの

落葉して朴は孤心を深めをり  
闇せまるときのやさしき白障子  
かりんの実傷つきたるがよく匂ふ  
秋の夜を焦がすや山車の揃ひ曳き  
全身の鴨の着水入り日さす

竹の花 大川 ゆかり

ゆつくりと乾く捨て舟竹の春  
三日月やつついて閉める貝の口  
秋思かなコルクくづれてワイン開き  
割れ石榴携帯電話の圏外に  
ことはりもなく満月のついてくる



# 月光垢離

〔小唄をうたは、壺千包〕

辻 直美

轆轤から壺立ち上がる桜かな  
風船やあこがれに紐ついてをり  
春の夜のむむとふくらむコルク栓  
春蟬や人にも羽化のころざし  
梅雨の月埴輪の口がぽと言ひぬ  
幼な子は上向いて泣く茅花風  
網戸入るるや青々と夜の文目  
板の間にひらたく坐る大暑かな  
さう聞けば生きよ生きよと時鳥



蟬の穴兵器につきし雷の文字  
酢橘切る水の地球を二つ割  
この道のまつすぐ釣瓶落しかな  
夕月を叩きかなかなかなと  
小鳥来てをり赤ん坊は来つつあり  
銀漢を哭きつつ獅子の渉るかな  
枯山の月光垢離といふべかり  
綿虫や白はときをり光る色  
昭和一桁きりぼしのよく縮む  
初刷を抱へ世界の重さとは  
眼の幅に開け真夜中の雪明り

『幸せのかたち』(自選二十句) 坂本 緑

熱帯魚コバルトブルーの泡静か  
遠泳のからだ自分でなくなりぬ  
きさらぎや体内にある波の音  
春風に楽譜さらさら喋り出す  
ががんぼにみつめられたる微熱かな  
くるぶしに波が来てをり夕焼けて  
勢ひのまま凍滝となつてをり  
野球部の生徒より泣き卒業歌  
卒業の近くなりたる空の色



足し砂をして三月の砂場かな  
目にみえぬものにぶつかる石鹼玉  
湯ざめして地球にひとりゐるごとし  
春の川渡りて野外授業かな  
ジョンレノン小さくかけて毛糸編む  
青空を引つぱつてくる合格子  
母となるこころ菜の花明かりかな  
曼珠沙華捨て身の色と思ひけり  
セーターの首出す前に告げしこと  
迷ひから抜け出て野火の走りけり  
蚕豆といふ幸せのかたちかな

# 沖作品



## 能村研三選

地下鉄に息つぎありぬ冬銀河

ユトリ口にさまざまな白冬立てり

烏瓜わが魂抜けしかと思ふ

バツクミラーの中黄落の閉ちてゆく

情報小さきチップに蛇穴に

鳥威しはるかな沖を低気圧

芋名月子の空部屋を開け放つ

障子貼る達成感の白なりし

浮雲のやうに目覚めてやや寒し

蓮掘りの匂ひをつれて帰りけり

木枯のふつと顔出す自動ドア

冬林檎円周率の割り切れず

日に映ゆる山の紅葉と白き峯

薄化粧して是からは冬の富士

象小舎も日陰り冬の日曜日

東京

小嶋 洋子

茨城

内山 花葉

市川市

くらたけん

鮎解いて湖より暮るる奥近江

鮎落ちて山影深く流しけり

二上山を背に露の曼荼羅図

長子次子家去るも良し秋なすび

祝ぎあとの明かりしらじら夜長星

小鳥来る屋根に太陽発電機

おんぶばつたその子を少し預かるか

鶏頭のまつ赤縄文火焰土器

山姥の灯してゆけりからす瓜

秋冷の風をうつして道路鏡

風棲める名残りの川床を軋ませて

稜線を湖面にぼかす紅葉雨

ダム底に一村眠る良夜かな

夜神楽の鬼のかひなに嬰眠る

夜鹿啼く天平の世を手繰るかに

愛知

三好千衣子

市川市

諸岡 和子

愛知

近藤 敏子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

地下鉄に息つきありぬ冬銀河 小嶋 洋子

小嶋洋子さんは昨年の中央例会で私の特選もしくは準特選の回数が一番多かった。若い方なので、発想力も柔軟で今乗りに乗っている時なのかも知れない。最近の地下鉄は、都内ばかりでなく郊外の私鉄にも乗り入れているせい、地下ばかりを走っているだけでなく、時折電車が地上部に出ることがある。古くから有名な丸の内線のお茶の水付近の聖橋のところでほんの僅かだが地上部に出る。小嶋さんの句だと、息つきというから、もう少し地上に出ている時間が多いところなのかも知れない。私がよく利用する新宿線の船堀付近は荒川の鉄橋があるため電車が地上に出る。地下鉄は大方が地下の暗いところを走るの乗客にとつても圧迫感があるが、地上に出たときなどはその圧迫感から開放されて思わず深呼吸をしたくなるほどだ。遮られていた視界も一気に開け夜空には冬銀河が瞬いてい

浮雲のやうに目覚めてやや寒し 内山 花葉

「寒し」と言えば、冬の季語だが、晩秋になって寒くなりかけたころの微妙な寒さを「やや寒」「そぞろ寒」という。朝目覚めたばかりの時、その日の寒さをまず敏感に察知する。「今日は昨日より寒いぞ」と口にしながら温かい寝床から出にくくなる。窓から外を覗くと、すっかり晴れ渡っている感じでもなく、浮き雲が浮かんでいて、何か季節の変わり目であると感じさせた。人間目覚めたばかりの時は、まだ焦点があつていないような庄洋とした感覚にとらわれるが、それを作者は「浮き雲のような目覚め」と捉えた。

木枯しのふつと顔出す自動ドア くらたけん

この句實際は、自動ドアから顔を出したのは、自分なのだが、主体を逆転させて木枯しがドアから顔を出したようにしたのがおもしろい。自動ドアというものは、自分の意志によつて手を動かしてドアが開くものではない。センサーがあつて自動的に感知してしまうので、自分の意志に関わらずドアが開いてしまうところが人間にとつては便利なのだが、逆に心の準備がなされていない時期に開いてしまうのも何か人間にとつては不都合なことが出てきてしまうのかも知れない。

鯛解いて湖より暮るる奥近江 三好千衣子

鯛と言えば琵琶湖が有名だが、湖北というか作者は奥近江でこの光景に出くわした。何本もの青竹を突き刺し外側から鯛簀を張りめぐらし追い込んだ魚を手網で掬う仕掛け。實の目は荒目・中目・細目の三通りがあり、荒目は鯉などを、中目は鰻、諸子、小鯛などを、細目は鮎を主に収穫する。近江木ノ浜に鯛師がいて、これを作っていた。晩秋から冬にかけては鯛漁も少なくなるので取り扱うが、もうそのころの日暮れは早く湖はすっかり静かになつてしまった。

(以下略)